

追悼座談会「梶原博さんの世界」

出席者

秋田 清 大嶋美登子 篠藤 明德 山野 敬士

地域社会研究センターの創設メンバーのひとりであった梶原博先生(別府大学短期大学部 教授)が3月23日、逝去された。そこで、センターの創設者である秋田先生、創設メンバーである大嶋先生、また、センターメンバーではないが、短大時代からの友人であった山野先生とともに追悼座談会を企画した。司会は、現センター長である篠藤が担当した。



故 梶原博先生

「経済学について」

篠藤：私たちの仲間であり、友人であった梶原博先生が3月23日に亡くなりましたが、私たち全員にとって、とても悲しい出来事でした。ただ、本日の座談会では、梶原さん好みに、自由気ままに話していただきたいと思います。『地域社会研究』に掲載された、梶原さんの記事、論考をリストにしてみました。『梶原ワールド』をみんなで自

由に語り合いたいと思っています。

掲載リストの中で1本だけ(「経済学について」)は、本号で再掲載しましたが、もともと短大の商経科の新入学生に対して書かれたものです。でも、ここに梶原さんの世界がとてもよく出ていたと感じました。私は98年4月に別府大学に赴任しましたので、この辺は、大学の先輩であり、本学に紹介された秋田先生に解説していただくほかはありませんね。

秋田：梶原さんは91年の4月に別府大学短期大学部に赴任しました。それと同時に、私は半年間イギリスに留学しました。その間、梶原さんが私のゼミの学生の指導をしてくれていました。翌92年10月に短大の大分キャンパスができました。この頃、商経科は受験生も多く、教員は皆張り切っていました。

92年4月に、新入生向けのパンフレットを発行しようということになり、出来たのが『豊かな学生生活のために』でした。その時の彼の原稿が今回収録した「経済学について」でした。

「こんなものでいいですか?」と、びくびくしながらこの原稿を持ってきた梶原さんの姿を今もよく覚えています。私がさっと読んで「いいどころじゃない、これはすばらしい」と言ったら、「こんなんでいいんですね」とホッとしたような顔をしていました。

ご存知のように、近代社会は、経済学的に見れば、貨幣関係が全面化した時代でもあります。モノの交換だけではなく、毀損された名誉も、悲しみも怒りも「慰謝料」という金の高に換算される時代です。そこでは、人と人との関係は、古い共同体的な関係とは異なって、一旦切り離された上で、貨幣によって結び付けられることになりま

梶原博先生が「地域社会研究」に掲載した著作

- ① 「経済学について」(『豊かな学生生活のために』1992年4月、本号再掲載)
- ② 「企業支援に関するシンポジウムを行なって」(第1号:1999年3月1日)
- ③ 「ホームページ制作と行政サービスについて」(第3号:2000年9月1日)
- ④ 「座談会 地域社会研究センター発足の背景と今後の展望」(第4号:2001年3月)
- ⑤ 「大学教育と地域交流について」(第5号:2001年9月1日)
- ⑥ 「座談会 地域の物語」(第6号:2002年3月1日)
- ⑦ 「『住みよい』町挟間を考える—地域づくりと情報化(1)」(第7号:2003年3月1日)
- ⑧ 「地域の情報化について(2)—デジカメと地域づくり」(第8号:2003年11月1日)
- ⑨ 「大学における活動と地域の人々 最近私に関わった人たち」(第18号:2010年3月15日)
- ⑩ 「中国人留学生の教育制度的背景について」(第20号:2011年3月25日)
- ⑪ 「『第53回静岡ホビーショー』レポート」(第24号:2014年10月1日)
- ⑫ 「日本模型新聞・編集長に聞く」(第25号:2015年8月10日)

す。本来、人はそれぞれ有機体としては別組織で生きているわけですから、お互いに分かり合えるということは難しいわけですが、分離され、独立した人として、貨幣を媒介にした結び付きになるので、ますますお互いの関係はわかりにくくなります。「話せばわかるは嘘」というのは梶原さんの口癖でしたが、そうした「犠牲」を払って、われわれは「自由と平等」と「個人の自立」を克ちとったわけです。「人の心はひとのもの」「自由になるのは自分だけ」(『リラックマ』)と、時に眩きたくなります。

しかし、逆に言えば、貨幣や物には人の様々な想いが込められているとも言えます。より正確に

言えば、貨幣や物は、言葉と共に、人の想いを伝えるものであると同様に、誤魔化すものでもあります。貨幣に込められている想い、貨幣に表されている関係、これを解き明かすのが経済学の課題だということだと思います。

山野:梶原先生の「経済学について」を読んで、「柄谷行人と類似した問題意識を先生が持っていたのだな」と思いました。関係の非対称性という問題意識ですね。先生とは昔、柄谷について話をしたんですけど、当時あまり読んでおられなかった。でも、「関係性の問題」を梶原先生は深く意識し自分の言葉で表現しようとしていたのだなと感じました。



箇条書き的表現

秋田:ここに挙げられた梶原さんが書いたものの内、特に前半のものに特徴的なことですが、彼は文章を箇条書きにするんですね。一生懸命人に説明しようとしても、箇条書きにすると、抜け落ちるものがある。それを、拾って読まないといけない。

山野:そうなんです。彼と話していると、その含みみたいなものを意識するかしないかで違ってくるんです。論理的で雄弁なんだけど結局感覚というものを出すんですね。ある時、宮崎駿の作品でどれが好きかという話になりまして、二人とも『ラピュタ』となりました。で、その理由が僕の場合は「【子供がひたむき】という宮崎作品の共通主題を一番上手に表現しているから」となるんだけど、梶原先生は散々論理的な言葉を並べた上で「映画の中の【空の青さ】」とか言い出さずんです。予測のつかないおもしろさがありました。僕のイメージをいつも超えてくるんです。

秋田:私の前では、そういう表現を遠慮していたんだという気がします。彼はガンダムやプラモデルが好きだったんですが、それは技術や美しさだったと思うんです。アニメの話をするときなど、私は物語性を重視するのですが、前回のセンターの研究会の報告もそうだったのですが、彼は、技術やかたち、色など、感覚的にとらえられ

るものを重視する。そこに彼の特徴があるような気がします。論理的に物事を考えるというのは、得意ではなかったと思う。学生への説教はよくやっていたけれども…。

山野：車を買うときもそうでしたね。ディーラーにいろいろ尋ねてました。センターメーターが流行したとき、「なぜ？」ととことん質問して、輸出車の問題なんか気付いてすごく感心していた。で、センターメーターの車を買ったかと尋ねると、結局買ってないんだけど。

梶原さんの優しい人柄と家族

秋田：たまに彼は、意地悪そうな顔をして私を見るときがあったんですが、それは、私が相手を攻撃するとき、「そこまでやらなくても」という感じでした。彼はどんな人でもその人の良いところを見ようとしてましたね。

大嶋：本当にそうですね。留学生に対してもとてもやさしい。いつも良い面をみつけて、力になろうとしていました。亡なる前も病気をおして、とことん留学生とつきあっていました。この学生は、こんなことをしたがついていて、こんな風に指導しているが、今後どうしたらいいだろう、と一生懸命でした。

山野：お母さんの影響ですかね？

秋田：お母さんによると、小さいときからもてんだそうです。

山野：本人も言っていました。「もし僕がこれで背が高かったら、えらいことになる…」って。

秋田：彼は、人の良いところだけを見るし、やさしいから、他の人に利用されて捨てられる可能性が大きいことが、私はいつも気になっていました。彼は誰とでもすぐに友達になれる。特に女性には警戒されない。

大嶋：でも若い女性だけじゃなくて、幅広いでしょうね。梶原先生は基本的に人が好き、その人を見たい、知りたい、感じたいと思っている。

秋田：育ちですかね。お母さんが絵を描かれる方だし、進歩的というか理想主義的な方だったんでしょうね。性善説にたっておられたという感じ

を、梶原さんを通して感じていました。

山野：「僕らとは育ちが違うな」という感じがありました。

篠藤：お葬式に多くの中学生が来ていました。これは奥様が中学校の先生である関係だったのですが、彼にふさわしかったですね。

山野：秋田先生が、「彼の葬式に中学生がたくさん来る。これも彼が望んだんだろう」とおっしゃって、僕も本当にそう思いました。人が好きな梶原先生に相応しいものでした。

秋田：彼は愛すべき人間でした。それが周囲に理解されていないところが悔しかったですね。

山野：僕もそう思いました。ただ、男性的な視点に照らすと疎まれるようなところがあったのかもしれないですね。

大嶋：女性は安心するんです。彼を疎むような男性からすると、不安を感じさせる存在だったのだと思います。自分が理解できなから不安になる。多くの女性は理解できなくてもそれもあります。自分の価値を押しつけようとするような男性は特に、自分が揺さぶられ崩れそうになるんじゃないんですか。



梶原先生のご家族

梶原さんはポストモダン？

秋田：彼は何でも興味を持つ。特に人間。困るのは、あちこち開拓していくのはいいが、興味がなくなったら、後始末はすべてこっちもち。

山野：論文もそんな感じがありますね。「課題は次回にする」と最初に書いている。途中で興味が

失せちゃったんでしょうね。

篠藤：私は今回初めてじっくり梶原さんの書いたものを読みました。これまでは、ななめ読みしていたんでしょうかね（笑）。じっくり読んで、私が現在持っている関心、疑問と言ってもよいのですが、梶原さんから教えてもらいたかったことが多くあります。「なんで死んでしまったんだ」と恨めしい気持ちさえしているんですね。

私の3年生のゼミで、現在、「オタク」を取り上げています。学生にとっては当たり前の「マンガ」「アニメ」「ゲーム」の世界が私にはまったくわからないから、私のためのゼミのようです（笑）。梶原さん、私とそんなに年が違っているわけではありませんが、こうした分野、得意でしたよね。

山野：ポストモダンの。断片が無根拠に共鳴する感じ。

篠藤：それは、秋田先生がいるので抑えていたからかも。

大嶋：私のところに来たときは、そんな話もしていましたね。いろいろ教えてもらったけれど、彼にとっては私は話し相手として話しがいがなかったかな。学生が居たら話がもり上ったと思うんですよ。

篠藤：梶原さんは、本当にガンダムとか好きで、彼自身がポストモダン（笑）。

山野：確かに彼はポストモダンのだったと思います。思想がじゃなくて彼の存在自体がです。言葉や映像が断片化されて、それらが自己矛盾を起こして内側から崩れてしまう。そんな不安定さにご本人は苦しみながらも楽しんでいた感じもありました。

篠藤：東浩紀さんが『動物化するポストモダン オタクから見た日本社会』を書いています。彼は最近『一般意思2.0』の中で、今日のインターネット社会では、人々の好み、考えが大きなデータベースを作っていく、これが毎日更新されている。この更新され続けるデータベースを、ルソーのいう「一般意思」であるというような議論をしています。私は、東さんの議論について基本的に反対なのですが、それでも、インターネット社会の有り様には関心があります。オタクも、こうし

たコンピュータ技術の発展とは無関係ではないです。こうした情報技術は、アナログ人間の私には縁遠いものですが、梶原さんは基本的に、こうした技術に精通するだけでなく、「好き」でした。

山野：梶原先生の印象といいますと、「いつまでも若い」って感じなんですけど、「子供っぽい」とはちょっと違うんですね。大人なのに子供の部分があるのが「子供っぽい」ですから。先生は、まるで「成長否定願望」がある感じでした。ピーターパンみたいに。ですから、彼のそんな気持ちが前面に出てくる遺作となった模型の論文はいいなと思いますね。

秋田：さっき、山野さんが「思想がじゃなくて彼の存在自体が、ポストモダンの」とおっしゃいましたが、私の前でのポーズだったかもしれませんが、彼はどこかで「体系知」に憧れていたような気がします。昔、機能と美しさが別のものだという議論に対して、彼は機能を徹底して追求することから美しさが生まれることを強調していました。車や戦闘機、戦艦の形の美しさが機能的に優れているものの追求から生まれている。機能の追及から優れた構造が生み出される、それが全体としての美しさを生む、というようなことを語っていました。



座談会風景

ガンの症状を記述

篠藤：「空が青い」とか、物事を芸術的な感性でとらえることは、彼にとっては大事だったんだと思います。また反面、体系的にはどうかなという

気がしますが、「知的関心」は強かったですね。ガンになって以降、症状をメールですっと記述し、私たちに送ってきました。彼は、自分に巣食ったガンの状態そのものにも知的好奇心を持っていたんだろう、と思います。

山野：自分の病気の進行について、車のディーラーに性能を訊くように、細かに知ろうとしていましたね。梶原先生らしい報告でした。読むほうは辛い時が多かったです。

篠藤：不安もあったでしょうが、やはり好奇心が大きかったんだろうと思います。そういう意味では、学者と言うより、職人的に目の前にあるものを理解することが彼にとっては大事だったのでしょう。

山野：よくここまで書くなと思いましたね。

篠藤：「僕、これでメールを書くことを終わりにします」と梶原さんが発信したすぐあと病院に行きました。すると、しゃべることが大変きつそうなか中で、自分の意識障害がどうおこっているのかを僕に説明してくれようとしていました。時間の前後や空間の位置、大きさなどをきちんと認識できないということを説明しました。認識の座標軸が崩れつつある苦しさを伝えたかったのかもしれない。苦しそうだったので、途中で遮ろうとすると、彼は、意識障害を伝えなくちゃいけないというんですよね。

学生に対する姿勢

篠藤：病気が進行していた時、留学生が授業について苦情を言ってきたことがありましたね。同僚の先生方がそのことについて話したことについて、すこし悲しがっておられました。「体調が悪そうだから、授業を止めさせた方が良いでしょう」「梶原先生にとってもそれが良いでしょう」というような話ですね。彼は、授業を続けることで、自分を維持しようとしていたこともありますが、私は「教育」という観点からも、死の病と闘っている人の話を聴けるということは大変意義があると感じていました。

留学生アンケートの記事(⑩)を見ても、梶原

さんが留学生教育に真摯に取り組んできたことがよくわかります。

山野：昔、トラブルを抱えた学生に対して、親身に相談にのっていたのを覚えています。もう20年近くも前ですね。あれは僕には絶対にできないことなので、本当に感心しました。

秋田：そうですね。梶原さんと二人で、統合失調症の学生の面倒を見たことがありましたが、夜中の12時過ぎに、街中探し回ったり、大嶋さんにも付き合ってもらいましたが、学生の自宅まで行ったり、大変でした。そんな時でも、彼はなにかそういうことをするのを楽しんでるふうでした。

山野：その学生は卒業の時は学科代表になっていましたね。

秋田：そうなんです。多分1年半、その学生の世話を二人でしました。私の娘に話したら、それは大学の教員の仕事じゃないだろうと、言われましたが、確かにそうもいえますね。でも、目の前にいる学生の「成長」に役に立つことをやるということが、教員の務めだとも言えますよね。梶原さんは特にそうでしたが、なにかちょっと変わったこと新しいことがあると、顔を出し、興味が続く限りは関わり続ける。学生にも、先生たち何やってるのとか、なんでも遊びのネタになるよねとか、先生たちにとっては、生きること自体が遊びみたいなものだよね、などと言われていました。

山野：彼は男性性が欠落しているというか、そんなところがあって、女性性で女子学生と接している感じがあるんですよね。学園祭の準備でめちゃくちゃ忙しかったときに、僕や他の先生が学生に必死になって指示を出していると、その横で、どこで見つけてきたのか、猫のしっぽみたいなおもちゃで彼女達をからかったりしてたんです。じゃれあっている感じ。

秋田：学生と一緒に電車で座ってる時もそんなことがありました。女子学生の襟や顔を触って、やめてよって言われてても、結構しつこいんですよ。横で見ると、学生も嫌がってるのか楽しんでるのかよくわからない。

山野：学園祭のときは、僕が「いいかげんにやめんか！梶原!!」と叱ったら、やめました。

音楽を愛した梶原さん

篠藤：先ほど秋田先生が「梶原さんは機能を愛した」という指摘がありましたが、芸術も、音楽や絵画だって、構造的に作りこみますよね。特に、彼が愛したクラシック音楽は、構造的、機能的に複雑です。

山野：梶原先生の音楽はそうですね。僕の音楽はローリング・ストーンズなんて理論がありません。「ギターはこの辺りをこんな指の形で押さえるとこんな音が出る」みたいな。それを先生は理論的に説明してくれたりしました。「そこで関連短調和音が必要になるよ」とか言うんです。「何すか？それ」なんですけど、僕にとっては。晩年も合唱の曲の魅力や構造の複雑さについて熱く語っていただきました。

秋田：大学時代に、彼は合唱をやっていた。ずっと九州管内のとりまとめもやっていた。けれども、別府に来て再開したのは、ずっと後。彼は、私の前ではその顔を伏せていたんだけど、混声合唱ずっとやればよかったのに。

篠藤：確か梶原さんは小さい時からピアノをやっていたんじゃないでしょうか。

山野：ピアノ的でクラシック的な感じでした。

篠藤：今年の1月、私夫婦と梶原さん夫婦の4人でフグを食べに行きました。私の妻はドイツ人で、現在は、考古学を専門にしていますが、ギムナジウムのおかげからずっとピアノを弾いていました。また、オーケストラでホルンも吹いていたようです。梶原さんの奥さんは中学校の音楽教師ですから、私を除く3人はそれぞれクラシック音楽に造詣が深いわけです。そこで、梶原さんがクラシック音楽について熱っぽく語っていたことを思い出します。クラシック音楽は、建築みたいにしっかりした構造物をつくる、緻密なメカですよ。それをよく梶原さんが話してくれていましたね。

山野：若いころ研究室で一緒にギターを弾いた時に、「先生、そこは面倒くさいんで、もう薬指で3本の弦を全部押さえちゃって下さい。音が取りゃO.K.つすから」とか言うと、衝撃を受けた

ような顔するんです。「指一本で3本の弦？そんなんありなの？」とか言って。合唱でも理論に忠実に、しかも他の声に「合わせる」ことに神経を傾けておられました。「この声がこの大きさなら、僕はそれにこの高さでこの強さで出さないといけないから…」と語ってくれました。興味深かったですね。亡くなる直前に初めて聞いたのがとても残念でした。



ピアノを弾く梶原先生

梶原さんと経済学

山野：梶原先生も大きな経済のうねりを理解していたと信じたいんだけど…

篠藤：経済のうねりは理解していないと思いますね。書いたものも少ないし。彼はただ、生きて、こうした潮流に抗う姿を示そうとしました。

秋田：論文は少ない。元々大学院の頃はケインズの研究をしていた。でも、今回読み直してみても、嫌々書いていたという言い過ぎだけど、なにか本当に書きたいものはこんなことではないかと思いつつながら、無理して書いているという感じがしました。

山野：緻密なものが好きな割には、論文は緻密に書こうとしないんですよね。その矛盾が僕にとっては魅力的でした。

大嶋：この冬、彼が研究室によってくれておしゃべりをしているとき、しみじみ「経済学をやって

いてよかった」、と言っていた。そのときはよくわからないまま「そうなんだ」と思って聞いていたんです。でも、今日の話や1992年の彼のエッセイを読んで、少しわかった気がします。

篠藤：やって良かったと言っているのは経済学史でしょうね。現在では、数式で説明するのが経済学の主流。でも利子とは何か、アダム・スミスの『道徳感情論』のように、人間とは何かを考えようとしてきたのがもともとの経済学でしたね。現在の経済学の状況について、水野和夫さんだったかが「人間理解を忘れ、今は片肺飛行している」と言っていることが印象的です。

秋田：彼は『道徳感情論』は読んだのかな？ ただ、スミスは好きだったみたい。

篠藤：秋田先生や梶原さんの研究室は、マルクス主義のお化け・向坂逸郎先生がいたところですよ。

秋田：僕が九大にいたころ、向坂先生のお弟子さんが、銀行論、金融論もやっていたし、経済学史もやっていた。そのころから、幅広く学ぶことを教えられた。

梶原さんは、経済工学科に入学しています。学生時代に混声合唱に入り、そこで経済学史の研究室のゼミ生に出会って、面白そうということになって経済学史を学ぶようになった。学生時代はプログラムを作るアルバイトもやっていたくらいで、コンピュータは早くからやっていたし、別大に来たときも、コンピュータの担当で来てもらいました。

● どうしようもないけど、愛すべき梶原さん

秋田：梶原先生のおもしろいのは、大学院の入学試験を寝坊してすっばかして、1年遅らしてしまったこと。

山野：そうなんです。彼の方が年上なんですけど説教したくなるタイプ。

秋田：葬式に来てくれた関先生（九州大学名誉教授）も、「彼が院生時代、彼をおこってばっかしだったことが悔やまれる」とおっしゃってしま

た。

大嶋：梶原先生は、それをどう受け止めたんでしょうか？

山野：怒られた時にはとても反省しているんですよ。でも必ず繰り返す。そのたびに新鮮な反省をする。一種の天才ですよ、ああなると。

秋田：僕は説教してましたかね？

大嶋：秋田先生は、説教していない。「困ったな〜」という感じですよ。

山野：ご家族も面白いですよ。お父さんはお通夜やお葬式の合間に、海の写真を撮っておられたし、妹さんも秋田先生の弔辞を撮影してましたね。「梶原先生の写真好きは血だったのか」と思いました。

秋田：お父さんは、梶原さんによると、彼に輪をかけたような遊び人だったらしい。家族は、お母さんがまとめられていたのかもしれない。お母さんは、一周忌の頃別府で個展を開きたいとおっしゃっていました。

彼は絵は描かないけど、写真を撮っていた。春田さんと彼の写真をみて、「説明が多すぎだよ。撮りたいところを真っ直ぐ撮らんと」とか言っていたら、みるみる腕を上げましたね。

山野：僕の見合い写真を撮ったのは梶原先生なんです、実は。「こりゃ大役だ」と言って、なぜか木に登って撮ってくれました。「上からのアングルだな」とか言って。「何やってんだ、この男は」と思いましたが、おかげで結婚できました。

● これからが梶原さんの出番だった

篠藤：僕は今、「地方消滅」「地方創生」に関心を持っています。政府は、地方の人口減少は、仕事がないためだと考え、様々な施策を展開しています。ただ、現在の経済現象を見ると、ギャンブル的なマネー資本主義が世界を覆っています。生産や暮らしに不可欠な貨幣ですが、その規模は実体経済から遊離して、とてつもなく大きくなっていますね。グローバル経済とローカル経済の違いを強調している考えも注目されています。こうした

中で、大多数の労働の価値は大変低くなっています。

秋田：派遣法の改正案などをみても、かつてのように皆が上昇するということができない仕組みができつつある。楽しければいいじゃないかという、上の世界を笑うような人たちを育てられればいいんですけどね。

山野：イギリスの労働者階級みたいだね。プライドがある。サッカー見て、ビールを飲んで。自分たちでルールを作る。「文句あるか」みたいな。相手に伝わらないことを喜ぶ。

篠藤：ピケティの議論や広井良典さんの『定常型社会』、水野和彦さんの『資本主義の終焉』などのように説明する仕方もありますが、梶原さんのものを読むと、彼は生き方の見直しを示し、また、彼自身が前に述べたように、ポストモダンのに生きることで示したのでは、と思ったりします。

地方の問題とか考えていくと、単に、経済的問題として考えると、うまくいかないこともあると思います。マクロ経済的には、金融商品を扱うグローバルタワーとその関係者に富が集中する。また、実体経済でも、医療やそれに関する保険など「命」をターゲットに市場化すると巨額なお金が動くでしょうね。そういう経済論理からすれば、「屁みたい」な生き方をしていく。それが梶原さんです。ガンダムとか漫画とかをとっても愛しました。

秋田：「地域の物語」についてもだいたい語り合いましたね。

篠藤：私は、掲載された中で、デジカメの論文(⑧)が一番好きですね。地域の誇りみたいなことは行政活動の対象とは違います。ここに行政が関わるとだめになってしまいますが、今日のまちづくりではとても大切になりますね。梶原さんは、「一般化」したとたんに、陳腐なものになるといっています。デジカメやインターネットを通じた対話・感想を重ねていく中で人々が共有・共感していくものの中に、「地域の誇り」を見出そうとしていることは新鮮でした。

秋田：まだ、スティールカメラを使っていた頃、彼が挟間の写真を撮って来たのですが、その中に

猫の写真が1枚入っていました。「えっ、猫？」と言うと、「そこに居たんですよ」って言うんです。「おもしろいね」と言うので「でしょう?!」って答えていました。

篠藤：現在、「地方創生」との関係で、大学と地域の関わりが注目されていますが、どこをみても「仕事づくり」のため。それだけでいいだろうかと思います。学生の多くは、家族、友人と共に普通に生きたいと思っています。私たちの時代のように、お金や地位を求めるのではなく。そういう意味で、「ありのまま」を大切にする生き方が問われているのではないのでしょうか。梶原さんはそのようなものを私たちに教えてくれた気がします。梶原さんが「学長」になっても面白かったのでは、とつい思ってしまいますね。言い過ぎですかね(笑)。

山野：そうになると、会議の開始時間が遅れたでしょうね(笑)。

秋田：今日は、わたしが知らない梶原さんのいろんな側面が知れて、大変面白かったのですが、ここに梶原先生がいれば、もっと楽しかったのにとつくづく思いますね。

篠藤：本日はみなさん、ありがとうございました。こうして言いたいことを遠慮なく言う座談会を開けたことは、私たちの、愛すべき梶原さんへの供養だと思います。